

第１回中心市街地活性化推進委員会 議事要旨

日時：平成２５年７月３１日（水）１４：００～１６：００

場所：内閣府庁舎５階 特別会議室

出席者

横森委員長、秋葉委員、足立委員、阿部委員、関委員、原田委員、古川委員、三宅委員、村木委員、山崎委員

議事次第

- １．委員会設置の趣旨と主な論点案
- ２．委員からのプレゼンテーション
古川委員：高松丸亀町まちづくり戦略
三宅委員：地方都市における住民のための“社会資本”整備
山崎委員：コミュニティデザインについて

議事要旨

委員からのプレゼンテーションを踏まえ、自由討議において以下のような意見があった。

（Ａ委員）

- 商店街振興を乗り越えた中心市街地活性化、コンパクトなまちづくり、コンパクトシティといった中心市街地活性化をやらないとうまくいかない。
- エビデンスに基づいた議論をしないと、共通の理解、国民に理解してもらうことが難しい。

（Ｂ委員）

- 金融機関が投資できるような環境ができなければ、廃業する店が増え、どんどん預貸率が下がり、不良債権が増えるという悪循環になる。

（Ｃ委員）

- イギリスのＰＰＧ６という都市計画では、借地が多く９９年間などの長期間を設定しており、自然と所有権が消滅する結果、土地

が使いやすくなっている。日本でやるなら税制を絡めて安くする
ならありえる。

(D 委員)

- 作れば売れるという黄金期を過ごした経営者から再生し直すことが一つ、また人を集めるツールの一つとしてコミュニティの担い手を商店街でつくること、この両輪が重要。
- 行政にぶら下がり何とかなれと怒鳴っていた時代から、自分たちで街づくりしなければならないという時代になった。
- これからは若手の人材育成、NPO団体・農業団体・高校・大学と連携しながらこの街をどう再生していくか。誰がどうやっていくかのベースがその街にあるのかが重要。

(E 委員)

- 本当に地域の中にはいってまとめていく力がないと、基本計画を作るのは難しい。行政だけではなく、市民やNPO団体から提案してもらおう形でもいいと思う。
- 中心市街地活性化がうまくいっているところは、コミュニティがあったわけではなくて、コミュニティを作り変えてきた。

(F 委員)

- エリアを商売のためでなく、市民の方が活躍する舞台にしていく。街なかがおもしろそうな場であるとのイメージを先に作ってから店舗を増やしていく。
- まちを使い捨てていくのではなく、今あるものを守り活用しながら進めていくことを提言したい。日本の田舎は今後資産価値を持っていくものになると思うので、次世代につないでいくような仕組みとして中活を捉えなおしていきたい。

(G 委員)

- 土地問題の解決については、役所がやるのは無理だし、田舎には民族主義に近い排他主義があるから、よそ者がやるよりも自分たちで解決すべき。
- まちづくり会社は、リスクを負う者だけで構成し、民間がリスクを負うことを基本とすべき。その際に、自主財源をいかに確保するかが重要である。

(H 委員)

- イベントを仕掛けるのが若い人たち、どんどん外の人たちを引き入れられるかが鍵になる。
- 被災地で中心市街地活性化をする場合、人をどう引っ張ってきて、バトンをどう渡していくかが重要。
- 中心市街地のスケール感としては、400mくらいならまとまりやすい。200mだと物足りないし、600mだと直線で端が衰退する。

(I 委員)

- 中心市街地の規模、賑わいをつくる規模についてどう考えるのか、それから活性化に必要な溜め地をどう確保するのか、それをどういう体制でやるのか、財源をどう出していくのかが重要。

(J 委員)

- 商店街の人だけでは難しいところを、その他の人たちとどう繋がって盛り上げていくか、商店街側からでも、なかなか動いてくれない場合は市民の側からアプローチしてもいい。
- 外部の者が現場に入る場合、ほとんどしゃべらず、人の話を聞く。役所に3人紹介してもらい、紹介された人に更に3人紹介してもらい、100～150人の人に会うと、みんなが尊敬している人が見えてくる。そこからワークショップをやって参加してもらえば、どの人がキーマンが分かってくる。

以 上